

はりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも、おもひのほかなるやうにおぼえてよみ侍りし。

おもひきや手もふれざりし梓弓起臥わが身なれん物とはおなじ頃武藏國へうちこえて、こて指原といふ所にちり居て、手分などし侍りし時、いさみあるべきよし兵どもにめし仰せ侍りしついでに、思ひつゞけ侍りし。

君の爲世の爲なにかをしからんすて、甲斐ある命なりせば就中第二の歌、命を委ぬるの志節、所謂君爾忘身國爾忘家の語にも叶へり。是を以て第一と定め給ふ。其遺像を圖せしめられんとて、故實を尋求めらるといへども、三公及親王等甲冑の式、其時節の故實知がたくして止み給ひぬ。武臣にしては楠公正成父子、忠貞を世々にし、殊に湊川戰死の前櫻井の驛にして、教戒の受授于今人の口碑にあり。公受授の形容を圖し、世子へ授け給んとて、數十年當時の模様を考索せしめ給ふに、多く意思に不叶。多方に求之、漸くして享保九年の春に至りて、其形狀を得て始て畫師狩野伯圓に命じて畫せしむ。畫しばく改め模して乃成りぬ。讚を大學頭林麿に請給ふ。讚未成、五月九日群臣を乗給ふ。嗚呼

痛哉。明年乙巳の春津田執事敬備、爲藩邸留主官て東都に住す。畫師伯圓享年八十四歳、不料に楠公父子受授の圖を模し來て敬備へ贈る。敬備甚欣び、乃ち某をして讚を鳩巢室先生へ請へり。先生撰著して其畫に題しぬ。于時秋八月裝飾して執事の家に珍襲せり。

惟昔北條氏恣滔天之惡。氛祲上蔽三辰。宸極晦光乘輿蒙塵。天子銳志中興。縹思謀臣。安危扶顛。楠公其人。料敵制勝。用兵如神。若夫龍蟄乎九淵。雷震乎八紘。以一身當天下之衝。以孤城挫百萬之英。卒能掃靈鯨鯢。以致四海之澄清。緊公之膚功偉略。孰復與之抗衡。迨乎國難重興。兩虎競爭。海宇潰決。天傾墜崩。公獨憐々王室。始終一誠。方關西之役。既知國事之不可爲。寧血戰而結纒。中路歸子於家。諱々誠以忠貞。今其言與心。皆丹青之所不能傳。而特見於圖者。儼然之貌。藹然之色。總角跪前。見子之翼。一編親授。善乎貽則。子孫世守。忠孝兩得。嗚呼公乎。臨死從容不忘愛國。悠悠千載。瞻仰曷極。唯可與蜀相並稱而比其德者歟。

一、紀州の孝子勘四郎の事

紀伊國那賀郡宮村百姓

勘四郎 已五十八歳  
老母 已八十歳  
勘四郎母 已十四歳

右勘四郎早く父に後れ、田地屋鋪無之、郷中に小家を結び母を指置き、六里餘有之在家へ奉公致、毎夜母方へ見舞孝行仕る事、十年餘一日も不忘、四十年以後奉公仕廻、妻を迎へ才次郎を儲け候得共、困窮甚しきに付、妻と相談の上致離別、益母親へ盡孝候。母老年にて眼見え不申候。勘四郎も耳遠く乍難儀、日雇を渡世仕候。其先々にて食物有之候へば、必ず持歸り母に進め、其餘を自分給へ申候。至孝無隠、一郷の者共申合、勘四郎貧窮を取立申度趣、名主より御役人へ相達、紀州様達御聽、當年御沙汰有之、勘四郎母子一期毎年米四石宛被下候由。